

16-0

(包み紙)

「御上様御書写

壱通

村川市兵衛

了春院様御書写

壱通

御触書写

壱通

古案文写

壱通」

16-1

(端裏書) 「御書写」

覚

一村川市兵衛手前不成候付

在郷江参度由願候段承知

申候、只今之節参儀無用与

可被申付候、塩問屋今程兩人

ニ而候へ共市兵衛一人自今以後

申付候間此段可被申付候

16-2
天和式 戊二月十一日

(端裏書) 「伊豆守様より太守様江御内證之入割

書頭候正徳式年之古案文写」

一私より三代已前迄者各年ニ江戸へ相勤申候ニ付

勝手続不申五七年ニ一度宛相勤申度由

御願申上候得者松平伊豆守様より御内

證ニ而太守様御合点被遊候故ニ而大坂へ

引越候て御払米作廻被仰付壱俵ニ付

五分宛之口銭可被遣由ニ付

新太郎様御代御歎申上候所御米千俵無利

拝借被為仰付一年越ニ上納仕候、尤大坂へ

引越候而著竹嶋渡海之通路悪敷御座候ニ付

難有奉存御請申上候、當御代々罷越候

而茂右之御米拝借仕申候、其後御簡略

ニ付右之御米拝借不被為仰付依之

又々御歎申上候所塩口銭爰許入津之分被為

下置御蔭を以江戸相勤申上候竹嶋渡海之

所務次第減少仕候付私親御願申上江戸八九年ニ

一度宛相勤候様被為仰付私代ニ罷成御

目見申上五六年ヶ間竹嶋渡海致させ候所

拾七年已前不慮之義付渡海制禁与

被為仰出迷惑至極奉存私義江戸へ

罷越殿様以御威光存候旨御願

申上候所ニ御公儀ニ茂被為聞召届

度々首尾宜敷時節御座候得共私不運故

致變化弥以永逗留仕遣銀等も無御座仕合ニ

罷成無是非罷帰申候

一私義五年以前迄江戸へ通路仕相勤申候

得共近年不勝手故疎略ニ罷成申乍恐

難捨置奉存候付御願申上候、御慈悲与

被為思召少々之御扶持ニ而頂戴仕候者

江戸表御出入之御屋敷相勤何卒手遣も

出来候て其上ニ而殿様以御威光を

御願申上度奉存候、恐多奉存候得共願之通

被仰付被下候ハ、難有奉存候、已上

村川市兵衛

16-3-0

包紙

「文政元年寅八月廿一日被仰付候御上下之御目録
御裏判太田十五兵衛様より被遣候事」

16-3-1

(端裏書)

「御触写」

定

一村川市兵衛江來朔日より塩之口錢

被遣候間可有其心得候先年之通

大俵ニ壹分小俵ニ五厘之口錢

相立可申候、自然隱忍輩於

在之者已來相聞候共急度

曲事ニ可申付候間町々念を入

可申渡候、以上

白井五郎左衛門

延宝元年丑十一月廿九日

鹿野伍助

惣町

目代中

16—4

(端裏書)

「御書写」

一筆申入候然者村川

市兵衛侍先頃江戸江

参着申候得共相煩申由

二而去ル六日ニ荒志摩

長屋ニ参万々御差図

次第ニ可仕与申ニ付御聞

役衆被申談江戸万々

首尾具ニ被申含候

殿様ニ去ル七日ニ首尾能

御目見仕候村川市兵衛侍与

在之候ニハケ様之者とも

父子

公方様江御目見ヘ

難調候間此度

公方様ニ之御目見ヘ

若調不申儀も可有之与

御聞役共申候、就夫何茂

被致相談親市兵衛義者

年罷寄最早江戸江

罷越義難成ニ付此度

侍罷越、則名をも市兵衛

与申候と申込候者御目

見ヘ調安可有之与志摩

被存名を改親之名ニ

被致候由志摩より我等方へ
右之趣被申越候、此趣可被
得其意候

一親市兵衛義早々名を

いか様ニも替申様ニ可被

申渡候

一最早此已後ハ親市兵衛

江戸ヘ不罷越セかれ市兵衛

義参候様ニ親市兵衛ヘ

可被申渡候

一村川義江戸仕舞候者

直ニ其元ヘ帰候様と各ヘ

当春申渡候得共江戸より

直ニ当地ヘ罷越首尾能

候ニ付直ニ当地ヘ参候様ニと

江戸之便ニ村川方ヘ家来

かたより申遣候、恐々謹言

但馬

六月廿一日 御判

柴山甚内殿

鷺見佐左衛門殿